

8月2日 平和聖日「平和のみどりご」ヨハネ 13：12～20

数年前、愛光保育園の卒園式に、来賓で来られたある方が卒園児に向かってこのような祝辞を述べられました。「皆さん、将来は“役に立つ人”になってください。」皆さんはどう思われるのでしょうか？悪気がないことは分かっています。けれども私は嫌な思いがしました。だって、私（たち）は“役に立つ”人間を育てるために一生懸命子どもたちと関わってきたわけではないからです。保育園には歩けない、言葉も出ない、まったく赤ちゃんの時期から来ている子どもたちもいます。そんな時期から「この子は将来役に立つ・・・」なんて思って接する人間がいるのでしょうか。いろいろな子どもたちがいます。生意気だったり、反抗的だったり、関わりが難しい子もいます。それでも粘り強く、辛抱強く関わるのは目の前にいるその子がただただ愛おしく大切だからです。そんな子どもたちを送り出す日に簡単に“役に立つ人”になんて言ってほしくなかったのです。

この人間の価値を「役に立つ、立たない」で測ろうとする「神話」は、もはや私たちの社会の日常になっているようにも思えます。私は野球部でしたが、顧問の口癖は「お前は使えんのお」でした。バイト先では営業成績の悪い社員が上司から「この能無し！役立たず」と罵倒され、泣いているのを見してきました。教誨師として少年院に行ってみると、子どもたちの中には親からは罵られた経験しかなく「どうせ自分なんて・・・」と諦めている子たちの多いこと。この悪魔的な神話は私たちの社会の隅々にまで行きわたり、私たちを蝕み、互いに助け合い、支え合う精神を破壊し、さらには立場の弱いから命を奪うことを正当化するまでに成長しているように思えます。

2016年に津久井やまゆり園という障がい者施設で起きた事件を覚えている方は多いことでしょう。植松は食事、移動、排せつが出来ない人間は役に立たない、「生きる意味のない命だ」と語り、19人の障害を持つ方々の命を奪いました。最近、裁判が終了し、報道などでたびたび取り上げられています。植松と面会し、裁判を見守り続けた奥田知志牧師はこう語っています。

「最後の質問で、君はあの事件の直前、役に立つ人間だったのか、と問いかけると、彼はちょっと考えて『あまり役に立たない人間だった』と返してきたんですよ。事件では、彼が生きていい命とだめな命の分断線を引いたように言われるけど、彼は一歩間違えば意味のない命になる分断線の上を綱渡りのように歩いてきた若者なんじゃないでしょうか。生産性があるかないか、自分がどう見られているか、それにおびえてきたんじゃないか。」

「自己責任」「人に迷惑をかけてはいけません」「自分のことは自分でやりなさい」皆さんも聴いたり、言ったりしたことがあると思います。冒頭の「人の役に立つ人になりましょう」もその一つです。けれども、これは推し進めれば、そうでない人は生きる意味がない、それが出来ない奴は死んでしまえ、に容易く変容します。そしてその尺度は実は私たち自身にも向けられるのです。そして自分が役に立てると思えないとき人間はどうするのか？誰かを貶めるのです。私たちの社会は、だれかを蔑み、貶めることでしか、自分の価値を自分で保てなくなるところまで来てしまっているのではないかと思えることがあります。先日 ALS（筋萎縮症）の難病に悩む女性を、優勢思想を持つ医師二人が殺害するという事件もありました。増加しているヘイトスピーチ、ホームレス、障がい者、子ども、高齢者、性的少数者など社会の中でも弱い存在への差別、こういった感情の「根っこ」は同じところにあると思います。誰かを貶めることでしか、自分の価値が見いだせない弱さです。

このような私たちの社会を蝕む神話に対して、聖書は人間の価値をどのように語っているのでしょうか。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。(創世記 1:27) 神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった (31 節)」命に役に立つものと立たないものがある？聖書はそんなことは一言も語りません。神が造られたものに失敗作は一つもなかったのです。造りたいのちは“すべて”“極めて”良かったのです。あらゆる命が

祝福されていたのです！

しかも、聖書は語ります。私たち人間は神さまに似せて造られた、と。古代、神に似た者とは誰を指したかご存じでしょうか？王です。バビロニアの王、エジプトの王、ローマ皇帝、皆、神を名乗り、神の似姿を持つと主張しました。それは日本の古事記などの神話でも同じです。支配者たちは神の似姿を引き継いでいる、だから人間を使役する権力が与えられている、各地の神話は権力者たちに人間を支配し、コマのように便利に扱い、必要なくなったら使い捨てにする根拠を与えるために書かれたのです。そのために世界中の神話で神の似姿という言葉は王のために使われました。ところが、聖書は違います。すべての人間は神に似せて造られたとあるのです。この世界に使い捨てて良い人間なんていない。価値のない人間なんていない！意味のない命なんて1つもない！聖書はそう語るのです。

私たちの信じるイエスも相手が役に立つかどうかなんて全く気にしない方でした。たとえ、子どもだろうが、障がい者も、高齢の者も、たとえ娼婦だろうが、異邦人だろうが、そしてたとえ罪人だろうが、すべての人に仕え、すべての人を愛し、すべての人と共に生きました。そんなイエスが十字架にかけられる前の最後の夜に教えられた言葉です。まるで自分が奴隷であるかのように、弟子たちの前にかがみ込み、一人一人の足を丁寧に洗いながら教えられる言葉です。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならぬ」隣人に対して愛を忘れないこと、相手よりへりくだること、イエスはそんなあり方を私たちに教えます。

そして最後の最後にご自身が「役に立たない」と言われる命の最前線に立たれたのです。十字架につけられて殺されます。意味のない、役に立たない罪人として処刑されます。その役に立たない、みんなの迷惑だと見捨てられた命が、私たちすべての者の罪を赦し、すべての者を救う、最も大切に、最も価値のある命となられたのです。このイエスの犠牲を前にして「意味のない命」など一つもありません。

この人間が役に立つ、立たないという偶像崇拜は教会の中にも根深く巢

くっています。「忙しくて礼拝にも出れず、教会のお役に立てなくて申し訳ありません」「高齢になって奉仕も出きず礼拝に出るだけで私なんか役立たずで・・・」「私なんか何の取り得もない、居ても居なくても一緒です・・・」時々、こんな言葉を教会でも耳にします。謙遜なのは分かります。悪気はないのも分かります。でも、もう辞めましょう！イエスの前に「役に立たない」人なんていないのです。私たち一人一人は、存在しているだけで充分なのです。あなたが居てくれる、それだけで、祝福は広がります。私たちは神さまから祝福され、良しとされた一人一人なのです。

イザヤ書はイエスをこう預言しました。「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。」イエスの教えが世界を覆うとき、命に序列をつける偶像崇拜が打ち砕かれるとき、それは各地を血で染め上げた軍服がすべて焼き払われる日です。人を殺すための道具だった剣は鋤に、槍は鎌へと打ち直される日です。私たちはその日を信じて、今日も御言葉を聞き、イエスにこそ従う道を歩みます。それが私たちのたどる平和への道ではないでしょうか。最後に詩篇の言葉を聴きましょう。「85:9 わたしは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます／御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に／彼らが愚かなふるまいに戻らないように。」